

## 九州の地で防災・減災を学ぶ

### Learning about disaster prevention and disaster prevention in Kyushu

聞間理

九州産業大学

**概要**：九州産業大学では「希望のあかりプロジェクト」を2011年から継続してつづけている。今でもその活動を通じて、震災について多くのことを教えていただいているが、その学びはプロジェクトに参加している数名の学生のみにとどまっていた。そこでプロジェクトに参加していない学生にも震災について学び、日頃の行動を見直す機会を与える授業を企画し、実行した。

**abstract**： At Kyushu Sangyo University, "Kibou no Akari Project" has continued since 2011. We have learned many things about the earthquake disaster, but learning was limited to only a few students who participated in the project. Therefore, I planned and implemented classes that give opportunities to learn about disasters review daily activities to students who did not participate in the project.

#### 1. 「希望のあかりプロジェクト」から九州に学びを持ち帰る

2017年1月のグローバルキャンパス大学シンポジウムでは、九州産業大学の「希望のあかりプロジェクト」の6年間の活動について振り返りをする機会をいただいた。その中で明確に意識するようになったことが「陸前高田市の経験を、九州に持ち帰り、まず本学に、そして近隣地域にしっかりと普及させることがメインのミッション」ではないか、という思いである。そのように発表を締めくくった以上、何らかの形でまず本学の学生対象に学びを持ち帰ることを意識した活動をしてみようと考えた。

#### 2. 防災・減災を学ぶ場をデザインする

「活動から得られた経験を普及させる」といっても様々な方向性が考えられる中で、「防災・減災を学ぶ場をつくること」を中心に据えることにした。そして普及のための媒体として、本学部の全学部・全学年を対象とした基礎教養科目の中の授業である「学生ボランティア入門」の枠をいただけることになった。これも6年間におよぶ「希望のあかりプロジェクト」への取り組み経験を評価されてのことであると思うとともに、授業の設定に協力してくれた大学関係者には強く感謝をしている。

より具体的な授業の到達目標については、本学に過去に講演に来ていただいた震災語り部の釘子明氏の話が手掛かりとなった。2014年に、震災シンポジウム「震災を学ぶ・被災地支援を考える in 九州産業大学」を行なった際に、釘子氏に本学で講演をしていただいた。彼の語りを聞くなかで、地震およびその後の津波被害のすさまじさもさることながら、その後に訪れた避難所生活の大変さとそれをどう支えていくかについて考えさせられることが多かったからである。特に「あなたは自分の避難所に、本当に何が備えられているか確認したことはありますか」という問いかけに私自身、答えられなかったことは強く印象に残っていた。そこで、「もし大学が避難所になったとき何が起こるのか」を明らかにすることと、「それに対する必要な備えは何なのか」ということを考え、実際に行動できるようなことを目標に据えた。

次にどのようにそれを学ばせるかについて思案を巡らせた。より切実な問題として受け止めてもらうために、学生たちが通っている大学が避難所化されたときのシミュレーションをさせるのが良いと考えた。そのために日本財団の「被災者支援拠点運営人材育成事業」に着目した。しかし、問い合わせたところ、実際に実施するには費用がそれなりに必要であることが分るとともに、自治体からの実施要請が多く寄せられているため、教育機関に対して2017年度には実施しない方針となったことを知った。実際に避難所を設営・運営して学生に問題を体感させるということは日本財団の協力なしには難しいと判断した。また、さらに過去の支援活動の中で集めた情報をまとめていくなかで、避難所生活だけが被災後に求められる状況ではないということも重視すべきポイントであると考えようになった。こうしたことから、2つの柱となる体験学習のイメージが固まってきた。(1) 大学が避難所になったときに生じる問題の掘り出しと対策を考えるワークと、(2) 震災後の24時間の行動を実験的に行うワークである。

(1) のワークの実施にあたっては、参考になる事例や体験談が必要である。また、学生たちが考えた内容について適切なフィードバックができる助言者が必要であった。そこで、前述した釘子氏に本学に来ていただき、そのご経験について、ご講演していただくとともに、その後の学生たちとのワークショップにも参加してもらって、彼らの発表にコメントしてもらうようにした。

(2) については、大規模な災害が発生した場合には、大学内に留まらざるを得ない状況になる可能性が高いことを想定して、実際に大学内で一夜を過ごすことを当初企画してみた。しかし、大学全体のセキュリティ・システムの問題やトラブルが起きたとき対応体制などを考えると担当教員一人で進めるには限界があり、他の教職員の協力を得るには諸々の手続きが必要であることから、いきなり大規模・集団的な演習ではなく、各人で無理のない範囲を設定してもらいながら最大で24時間、避難生活を想定して行動してもらうような取り組みにすることにした。

ワークショップという形式で行う以上は、それに慣れていない受講生が多いことが好ましいが、そのような学生は多くないことが予想された。そもそもこの授業を実施しようと考えた動機に照らせば、できるだけ多くの受講生に参加してもらうことも重要であった。さらに、2つの体験学習のワークをより具体的に設計していくと、それぞれ5時間ぐらいの時間が必要であることがわかってきた。ワークの内容から考えても、明らかに大学の基本的な授業形態である週1回90分を15回分というスタイルは向いていない。そこで、改めて本学の教務課と協議して、変則的に土曜・日曜を組み合わせる「通年集中」という授業日程を組むことにした。

授業内容も実施時期も変則的になることから、授業シラバスの提示だけでなく事前説明会を複数回実施して、受講希望者に必ず参加してもらい、そこでワークショップを中心とした体験型授業であることを丁寧に説明することにした。また、ワークショップの形式を初めて体験する学生が多いことを想定して、上記の(1)(2)の2つのワークの前に、ワークショップの形式そのものに慣れてもらうことも狙いとした機会を最初に設定した。ワークの内容については、授業全体のテーマの一貫性も考えて「災害とは何か」および「日本ではどのような災害が起こっているのか」を調べまとめることを課題としたワークにした。

このようにして、授業「学生ボランティア入門」の構成が固まっていた(表1)。

表1 授業「学生ボランティア入門」の構成

時期	回	内容
4月11日(火)・ 13日(木)	-	・履修希望者に対する事前説明会
5月20日(土) 13:00~17:50	1, 2, 3回	・本授業の達成目標 ・グループワークをしながら学ぶときの注意事項 ・自己紹介と講義履修した動機(グループワーク) ・「災害」という言葉から連想する言葉を書き出し整理してみる(グループワーク) ・1990年以降で日本で起こった災害を細かく列挙してみる
6月10日(土) 10:40~17:50	4, 5, 6, 7回	・大ホール型の教室における釘子明氏によるご講演「2011. 3. 11 あの日から陸前高田市で被災者はどう生き抜いたか」(授業履修者以外の学生も参加可能なオープン形式) ・釘子氏の講演を振り返る(グループワーク) ・釘子氏との質疑応答・追加の解説 ・九州産業大学(福岡市東区)の抱える災害リスクとは(講師より資料説明) ・地域避難所として大学を見た場合に起こりうる問題を抽出してみる(グループワーク)
6月11日(日) 9:00~16:20	8, 9, 10, 11回	・グループ別にテーマを振り分けての、対応策やルール設定の提案(グループワーク) ・釘子氏からのコメントと総評 ・防災シミュレーションゲーム「クロスロード」を使った意思決定についての学習(グループワーク) ・7月のワーク「防災バッグを作って、24時間避難生活を考えよう」についての事前予習の説明
7月1日(土) 9:00~12:00	12, 13回	・お互いの「防災バッグ」を持ち寄って、最初の24時間をしのご理想の防災バッグを考える(グループワーク) ・「24時間避難生活トライアル」のルール確認(以降は、時間外扱いで翌日9:00まで個別ワーク)
7月2日(日) 9:00~12:00	14, 15回	・お互いの「24時間避難生活トライアル」を振り返り、事前予想と実際の差異を比べる(グループワーク) ・理想の防災バッグを提案する(グループワーク) ・最終課題レポートについて説明※

※最終課題レポートでは、各日で行ったワークの内容をまとめ、それぞれのワークの中で学んだことと自分の防災・減災についての意識変化について書いてもらうものにした。

### 3. 授業実施の結果

事前説明会を通じて、46名の学生が授業を履修した。変則的な授業日程ということもあって1年生の参加は2名にとどまったが、その他の学年では2年生が18名、3年生が15名、4年生が11名とバランスよく散らばった。学部ごとの人数バランスについては、授業担当者の所属する経営学部が17名とやや多かったものの、学部間の参加者の散らばりも極端な偏りは生まれなかった。釘子氏の講演は、公開形式として広く学内に呼びかけ200名の学生に届けることができた。

各授業日の内容も、おおよそ当初の予定通り進めることができた。特に釘子氏の講演およびその後のワークショップは効果的で、それを境に皆が非常に多くの意見や疑問を出し、各課題を自分ごととして取り組むようになった。

講演の後に自分たちの地域での問題を考えるワークを重ねることによって、単なる悲劇と苦勞と感動の話に終わらないように釘子氏の話を活かすことができたのではないかと感じている。

最終レポートにおいても授業目標に照らしてワークの内容をしっかりと振り返っており、今後の彼ら自身の日常生活の送り方について考えてくれたことがうかがえた。代表的な声としては、「自分の地域の防災についても調べるようになった」（経営2年）「常に持ち歩くバッグの中身を強く意識するようになった」（商2年）「ここで得た知識は家庭内や友人にも話し広めていき、万が一の際にすぐ行動に移せるよう定期的に考える機会を儲けようと思いました。」（商2年）「この授業を受けて避難袋を作ろう、作ろうと言葉だけでやってきたものが現実的になってほっとしています。」（芸術2年）「この講義を行う前は、福岡では災害がほとんどないため何も意識していない状態であったが、災害のことについて考えることにより、自分のことは自分で守らなければならないと感じました」（工4年）などがあった。

土曜・日曜が中心となった授業だったことで、部活動等の大会などの関係で参加できなかった学生も出たが、最終的には最終レポートの内容をもとに37名の学生に単位を付与することができた。その中の学生の一人は、住んでいる地域で、子供の育成会のメンバーとして活躍しており、今回の授業を参考にして夏休みに子供たち向けの防災ワークショップ（もし小学校が避難所になったらどのような問題が出るか）を実施したとの報告も受けた。そのような展開が生まれたことを大変嬉しく感じている。

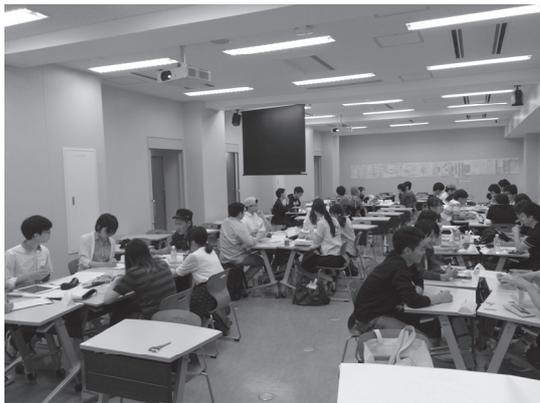


写真1 5月20日のワークショップ風景

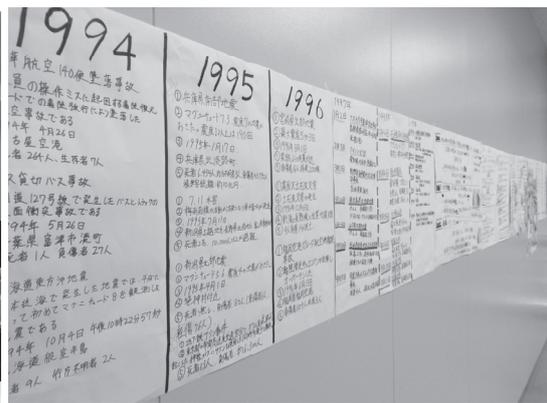


写真2 学生たちが手分けして作成した年表



写真3 6月10日の釘子氏の講演



写真4 講演後に場所を変えて行った質疑応答

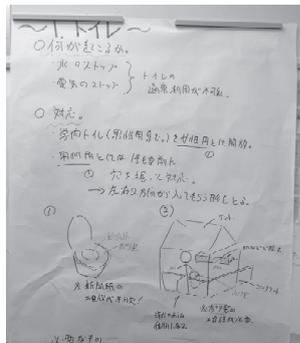


写真5 避難所のトイレ問題への対策を考える



写真6 災害対応も兼ねたカバンの中身を考える

#### 4. 今後の展望

なかなか多くの学生を東北の被災地に派遣できない九州の地で、陸前高田市とのご縁を活かして「活動から得られ

た経験を普及させる」授業を作り出すことができた。災害を自分ごとに引き寄せて考える防災・減災の観点から取り組んだことは参加学生たちの反応を見て間違っていないと感じている。私自身もこの授業を作るにあたって改めて自分のすべきことを見直した。授業の構築だけでなく、自宅の防災・減災について初めて取り組み、家族と24時間自宅避難シミュレーションも行い、防災士の資格も取るなど、多くの学びを得られた。

しかしその一方で、大学の授業単位として90分15回という枠内では、「自分たちの日頃の生活を見直す」段階までで終わってしまったともいえると考えている。その先には、「周りの人を巻き込み防災・減災の体制を構築する」、「実際に被災地域を訪問したり支援することを通じて学ぶ」といった段階があり、そこまで進むための道程は授業の枠内では整備できていない。本学では本稿の取り組みとは別に2017年度も陸前高田市に向けて「希望のあかりプロジェクト」は継続しているが、残念ながら今回の授業の履修者がそのメンバーへと加わっていない。授業の参加者たちにもっと強い一歩を踏み出してもらうための仕掛けを考えることは今後の大きな課題として残っている。

今年度は授業をつくるだけで精一杯であったが、来年度以降に同じようなことをしていく場合には、経年比較できるような学習成果尺度の整備も必要となってくるであろう。また、この授業の対象者が学生のみでよいのかということもある。学びの実質化を考えれば大学の教職員や地域住民の代表者にも加わってもらうことは欠かせない。

さらに懸念すべき状況として、本学では大学の組織改編が進んでおり、それに伴って人員配置や設置授業の大幅な見直しが進められている中で、やむを得ない事情で報告者が「学生ボランティア入門」の科目担当者を外れなければならないようになったことがある。授業という枠組みでは行えなくなったが何らかの形で継続させられないか、現在検討中である。

先行き不透明な状況に置かれているが、振り返ってみれば昨年の大学シンポジウムの報告のときにも、漠然とした思いだけしかなかった。それが一年の間にさまざまなご縁や機会に恵まれ、ここに投稿ができたことを考えれば、自ずから答えは、これからも何ができるか (can)・何をしなければならないか (must)・何をしたいか (will) を考え続け、誠実に挑戦していくしかない、ということになるであろう。これまで多くの人に支えられてきたことに感謝をしつつ、これからも多くの人に協力していただきながら、歩みを進めていきたい。

## 参考文献

日本財団「被災者支援拠点運営人材育成事業」

[https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/inclusive\\_society/train\\_disaster-response\\_staff/](https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/inclusive_society/train_disaster-response_staff/) アクセス日 2018年2月4日

内閣府「防災情報のページ 災害対応カードゲーム教材「クロスロード」(減災への取組)」

<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/torikumi/kth19005.html> アクセス日 2018年2月4日

## 著者紹介

**間間理**：九州産業大学経営学部教授，防災士。専門領域は経営組織論、組織開発論。2012年より陸前高田市にて被災者支援などの活動に取り組む。

大学住所：〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台2-3-1, E-mail:kikima@ip.kyusan-u.ac.jp

